

Hospital Information

泌尿器科におけるトピックス



副院長(泌尿器科部長) 藤岡 秀樹

天皇陛下が前立腺癌の手術を受けられたというビックニュースが日本中を駆けめぐったのは一昨年のことでした。もはや旧聞ともいえますが、いまだその影響はわたくしどもの泌尿器科では続いています。というのも、現在も前立腺癌を心配して受診される方が後を絶たないのです。

その背景は、1995年から2015年までの20年間で、前立腺癌は男性が罹患する他の癌に較べ最も増加率が高いという疫学的推計に裏付けられていると思われませんが、もう一つ重要な要因があります。すでに、前立腺腫瘍マーカーであるPSA(前立腺特異抗原)についてはご存知の方も多いと推察されますが、まさにそのPSAの普及が大きな原因と考えられます。

じつはPSAは10年も前から臨床に登場していたのですが、世間の関心が一気に高まった一昨年に、前立腺癌早期発見の切り札としてブレイクしました。いまでは50歳を過ぎた男性の検診やドックには欠かせない検査項目になっていますし、開業の先生方も積極的に検査をされるようになりました。その結果、多くの男性に異常値が見つかり、わたくしどものところに来られる状況が続いているわけです。この様な経過から、間違いなく早期の前立腺癌が多く診断され、手遅れになる前に適正な治療が可能となった症例が激増しています。これには、PSAが多額の貢献をしていることは確実です。

その意味で、「50歳を過ぎた男性の、年1回のPSA測定」は古いようで新しいトピックなのです。



健康わんぼいんとレッスン

1 Point Lesson

マルチスライスCTで冠動脈疾患を早期発見

当院心臓センター循環器科では16列マルチスライスCTを用いて冠動脈の診断を行っています。これまでのCTでは、拍動して動く心臓は撮影できませんでしたが、マルチスライスCTは直径2mm程度の冠動脈まで明瞭に評価できます。

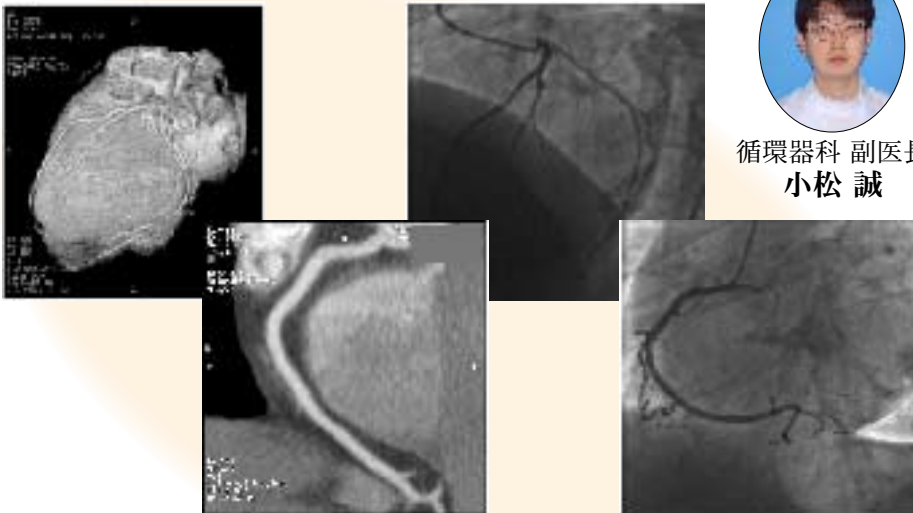
造影剤は50~100ml、15分で撮影できます。当院では独自の方法で、国内、海外を含めても造影剤を最も少ない量で検査できます。

図1は正常の冠動脈です。冠動脈造影と同様明瞭な画像が得られています。

図2は胸痛が頻発され来院された方です。受診時心電図や血液検査は正常でしたが、胸痛の起き方から不安定狭心症を疑い緊急で冠動脈CTを行ったところ、左冠動脈に狭窄を認めため、緊急で心臓カテーテル検査を行い冠動脈形成術(風船治療)に成功しました。

緊急冠動脈CTについても国内で実施できる施設はまだ数少なく、われわれは循環器科で開発したカラー解析ブランクマップシステムを併用し、冠動脈疾患の早期発見に寄与しています。

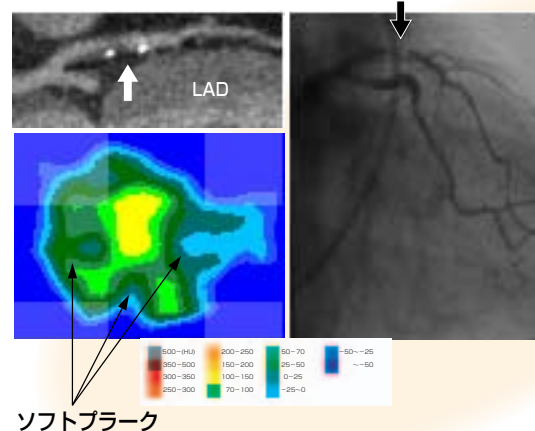
図1:マルチスライスCTによる冠動脈の健常例。



循環器科 副院長 小松 誠

左上図はVolume rendering、心臓を立体的に表現できます。左下図はCurved MPR。0.625mmの細かい空間解像度で心臓カテーテル検査で行う冠動脈造影(右上、右下図)と同様に明瞭です。

図2:緊急冠動脈CT(不安定狭心症の男性)



緊急冠動脈CTでは、左冠動脈前下行枝に高度な狭窄を認めました(左上図)。病変部の短軸断面を独自のブランクマップ(左下図)で検討したところ、脂質成分が多く破裂の危険の高いソフトプラークを認めました。そこで、引き続き緊急カテーテル検査を実施したところ同部位に亜閉塞を認め(右図)、冠動脈形成術(風船治療)を心筋梗塞発症前に施行することができました。

病気と栄養

尿路結石の食事療法

私たちが毎日とる食べ物には結石を作る成分が含まれていますが、反対に抑制する成分も含まれています。尿路結石の再発を防止するためには、これらの抑制する成分(結晶化抑制物質)を上手にとる意味で、栄養バランスのよい食事が基本になります。

① 水分をしっかりととりましょう。

食生活で最も注意したいのは水分の補給です。必要な尿量を確保するために、食事の時は水やお茶を一杯づつでも多めに飲むなど、意識的に水分摂取に努めましょう。ただし、アルコール飲料を大量に飲むのは逆効果になります。(腎臓病や心臓病などの合併症がある場合は水分制限が必要な場合がありますので、主治医にご相談ください。)

② バランスよく、規則正しい食事をしましょう。

偏食や過食を避け、肥満にならないようにしましょう。特に朝、昼は軽くすませ、夕食にたくさん食べる習慣や、寝る直前に食べることは望ましくありません。生活習慣を見直して、改善に努めましょう。

栄養管理課 西尾 勢津子



大阪けいさつ病院 心臓センターの概要

名誉院長(初代循環器科部長) 児玉 和久

大阪けいさつ病院心臓センターは1978年に設立されました。この頃は冠動脈造影検査法が急速に普及し始めている一方で、生活様式の変化とともに激増しつつあった虚血性心臓病への対応が強い社会的欲求として高まり、本邦でも大規模医療施設を中心に心臓病の専門施設が次々と創られ始めていました。

当時、私どもの大阪けいさつ病院でも他の病院に先がけて心臓の専門部門を設立すべく1977年からその準備が始められ、先ず先駆けとして小生が桜橋渡辺病院から招請され、翌78年循環器科と共に8床の重症治療室と12床のアフターケアからなるCCUがスタートしました。

最初のスタッフは循環器内科が小生を含め5名、心臓外科が2名の医師7人と検査科からの技師2名と専任の看護師20数名と少人数からなる所帯ではありましたが、それがむしろ強い団結心や目的意識もたらし、その後の順調にまた予想を超えた急激な発展に繋がりました。

私たちの日常のモットーは「**臨床こそが最高の医学研究の場である。患者さまは無限の師であり、医学の真理を常に私たちに提示してくれている。私たちは謙虚に初心にたちかえり、真摯に日常の臨床にまい進せねばならない**」というものであります。

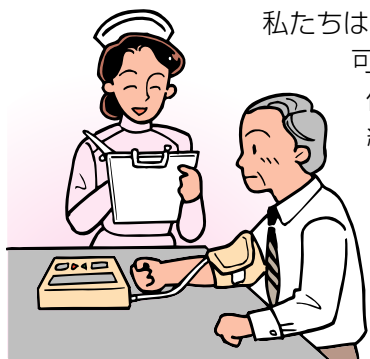
この旗印の下でスタッフ全員が一丸となり、昼夜を問わず急性心筋梗塞や不安定狭心症など極めて迅速な対応を必要とする心臓発作の急性期治療を中心に真摯に取り組み、それが評価されて多くの患者さまに恵まれると同時に、米国大学心臓会議(ACC)、米国心臓協会(AHA)をはじめとした世界的な学会やCirculation, JACCなどの一流学術雑誌に次々と論文が採択され発表される様になり、今や我々の心臓センターは国際的にも高い知名度と評価を得るに至っています。

ちなみにこれまで発表された論文数はACCで63編、AHA33編またCirculationには8編、JACC14編が掲載され、それらを含めた論文総数は英文92編、邦文620編にも上っています。

心臓センターを構成する陣容も発足当時とは比較にならないほど充実し、現在では平山篤志センター長兼循環器科部長、大竹重彰心臓血管外科部長を中心に内科系13名、外科系5名の医師に加え臨床工学士、検査技師が計10名、心臓循環器関連の看護師、クラークは計90名にのぼり、計35床からなる専用のCCU、ICUとアフターケア病棟と40床の入院病棟を保有して連日100%を超える稼働率を挙げ、毎日400名にのぼる外来患者を診療しています。

主な診療実績についてはすでに多くの一般雑誌のランキングなどでも報じられていますが、心臓カテーテルは2,100件/年(累積約30,000件)、急性期の再灌流治療を含む冠血管形成術400件/年(累積約5,000件)、両室ペースメーキング、ICDをふくむペースメーカーの植え込み180件/年(累積約2,800件)、頻脈型不整脈に対するカテーテル焼却術120件/年(累積約700件)、心臓血管外科では150件/年の開心術などを行いまさに本邦を代表するトップクラスの診療科に挙げられています。

私たちは更に将来の心臓血管領域でその主役を演じる可能性が期待されている血管内視鏡の開発に、他施設にさきがけて20年以上にわたり取り組み、実用化に成功するとともに全世界の注目を浴びるに至っています。今後さらに研鑽を積みより良い医療の実践と医学の更なる進歩発展に貢献して行きたいと考えています。



編集後記

心臓センターの紹介を児玉名誉院長にお願いいたしました。センターが皆さまに良質の医療を提供できるのも、医師はじめ関係医療、事務スタッフの連携のためのもので、それは、当院の他診療科においても共通してめざすところとす。今回ご紹介した看護の質の向上、セカンドオピニオンの導入もあわせて、今後も患者さまの立場に立って考える医療を目指したいと思っております。

インフルエンザが例年に比べ遅れて流行し始めました。手洗い、うがい、マスクなどでの予防も心がけましょう。

小児科 部長 西垣 敏紀

投稿の募集

(皆さまからのご意見・ご質問等)
メールでのご連絡はこちらまで
master@oph.gr.jp

病状の詳細につきましてはメールでは誤解が生じる場合がございますので直接ご来院の上でご相談くださいませ。

専門性の高い看護を求めて

3階西病棟主任看護師 大江 理英

(大学院修士課程 クリティカルケア看護専門看護師コース修了)

当院には、事故等の大きな怪我のために救急車で運ばれたり、病気で手術を受けなければならない患者さまが数多く入院されています。特に集中治療部門では医師とともに高度医療を行いながら、専門性の高い看護を提供することが求められます。

私は大学院で生命の危機状態にある患者さまへの看護を専門的に学んで参りました。専門看護師は日本看護協会による認定ですが、その役割は患者さまに卓越した看護を実践する、医療者に対する教育や相談にのる、患者さまと医療者との関係を調整する等があります。例えば人工呼吸器装着患者さまの呼吸を整えるために必要な看護ケアを看護師に教育する、突然の事故に戸惑うご家族をケアする看護師の相談にのる、患者さまの意見が反映された治療・看護が行なわれるように医師や看護師との関係を調整する等です。

これらの機能を果たすことで、患者さまやご家族の心身の苦痛をすこしでも和らげ早期に回復に向かえるよう、さらなる看護の質の向上に努めたいと考えております。

クリスマスコンサートが開催されました

クリスマスコンサートは、ご入院中の患者さまや外来で通院されている患者さまに、少しでもクリスマスの雰囲気を感じていただきたい、との思いから毎年開催しています。

今年は12月18日(土)午後1時30分から開催され、神戸フィルハーモニーの上野明子さん(フルート)、国塚喜美さん(マリンバ)、山村直美さん(ピアノ)が演奏するクリスマスコンサートの音色が病院内にあたたかく響きわたりました。

来年もお楽しみになさってください。



セカンドオピニオン制度を開始しました

セカンドオピニオンとは『主治医以外の医師の意見』を意味し、患者さまが現在の病状や、今後の治療方針について、主治医以外の医師(他の医療機関の医師)がどのように判断するのか、意見を求めることです。

大阪けいさつ病院では、セカンドオピニオンを希望される患者さまや家族の方に対して、他の医療機関の診療に関する資料に基づき、当院の専門医が面談のうえで、現在の治療方針などについて意見を提示する「セカンドオピニオン制度」を平成17年1月より開始しました。

- 面談は予約制で、面談時間は30分です。
- 費用は自由診療になり、30分 10,000円です。

ご希望がございましたら、

地域医療連携センター内

セカンドオピニオン受付までお問合せください。

電話:06-6775-2863(直通)



ご協力ありがとうございました～スマトラ島沖地震救援金募集～

患者さまや職員に対し、スマトラ島沖地震救援金の募集を1月末まで行ない、多額の募金をお寄せいただきました。さっそく日本赤十字社をとおして被災地にお届けするとともに、被災された方々の一日も早い復興をお祈りいたします。

皆さまの心温まるご寄附を頂戴し、誠にありがとうございました。